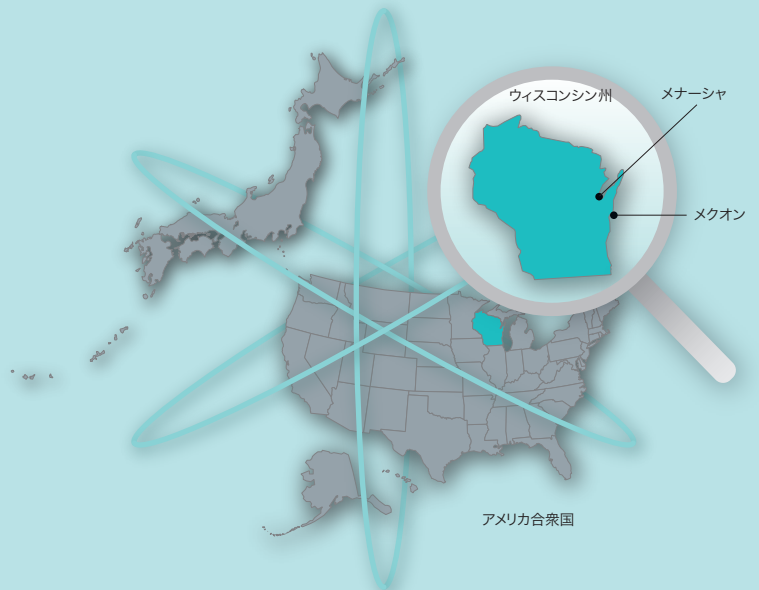


## 特集

交流を  
続けるために日米学校交流の事例にみる  
仲介者の役割

TJFは、国内外の小中高校における外国語教育や文化理解教育を促進する事業を行うなかで、双方の小中高校生が会える場をつくるために、海外で日本語教育を実施している学校と、日本国内の学校との橋渡しを、日米および日中間で少しずつ試みてきました。

今号では、子どもたちが、学んでいる外国語を実際に使って同世代と意思の疎通を図り、心を通わせる交流を継続させるにはどういったことが必要なのか、日米の小中高校間交流のなかで定着しつつある事例を三つ紹介しながら、交流の仲介者として留意している点を整理してみました。



## 特集 p.1

## 交流を続けるために

## 日米学校交流の事例にみる仲介者の役割

一本の電話から始まった交流のお手伝い

メナーシャ 2001日本研修ツアー

富里 第4回アメリカ・ホームステイ体験ツアー(2003)

私たちが感じたこと——お互いの国を訪ねた生徒たちの帰国後の感想文から

## TJFの事業 p.10

中国語を学んだ高校生の中国訪問——高校生交流代表団

## シリーズ

見る聞く考えるやってみる授業② p.12

“普通の学校”の国際理解授業——参加型授業で1年間をとらしてみたら

素顔の高校生② p.16

ぜんぜん違う二人だからこそずっといい関係でいられる。

## TJFニュース p.14

「高校生のフォトメッセージコンテスト」写真集を発行、英語版のサイトをオープン

2004年度第1回通常理事会・評議員会報告 ほか



# 一本の電話から始まった交流のお手伝い

TJF米国駐在代表連絡員…… 伊藤幸男

「実は、2年前から交流を始めた千葉県の小学校と連絡が取れなくなってしまいました。子どもたちの作品を送っても何の反応もありません。メールのやり取りも止まってしまって……。どうしてでしょう。子どもたちもがっかりしています」

途方にくれた、暗い声。電話の主は、米国ウィスコンシン州中東部メナーシャ市のクロビス・グローブ小学校で日本語を教えているリン・セスラー先生だった。セスラー先生は、小学校で教えるかわら、メナーシャ地区全体の小中高校の日本語教育プログラムを作成したり、ウィスコンシン州の日本語教師会会長や、全米の日本語教師会の役員を務めるなど、日本語教育に情熱を燃やしている有能な先生だった。

1991年、ウィスコンシン州と千葉県は姉妹州県関係を締結し、それを機に経済、教育、文化等の相互交流を推し進めることになった。教育の分野では教師たちの相互訪問が可能となり、また双方の教育委員会の仲立ちによって両者の公立小中高校の間で相当数の姉妹校関係が生まれた。クロビス・グローブ小学校もその一つで、千葉県内の小学校と1995年に姉妹校関係を結び、児童の作品やメールの交換等が始まった。同校では、併設の幼稚園の園児を含め子どもたち全員が日本語を学び、担任の先生方も子どもたちと一緒にセスラー先生の授業を聞くといった具合で、日本への関心も高く、交流への期待も大きかった。

順調に動き出したはずの交流が、2年後のある時から日本側の音信が途絶え、何度か呼びかけたが全く反応がない。対応に窮したセスラー先生の訴えが冒頭の電話だった。しかし、このことは姉妹校関係締結の当初から危惧していたことでもあった。それはどちらが悪いという問題ではなく、日米の先生方の勤務形態の違いからくるものであった。

アメリカの場合、管理職の立場にある先生でも最低5年から10年は同じ学校に勤務することが多く、一般の先生方はほとんど退職するまで同じ学校で教鞭をとっている。他方、日本の場合は管理職、教師とも一定の期間を経て異動するのが通例である。したがって、せっかく交流関係が進展しても、担当の先生が異動したり、サポートしてくれていた管理職がかわつたりすると、ことばの問題も加わって姉妹校関係が頓挫してしまうのである。そういう例を私自身、いくつも見聞している。

## 基礎からの積み重ねによる姉妹関係を

このような日米の違いをどのような形で補い、相互交流をよ

りよい方向に進展させていったらいいのか。これがセスラー先生から相談を受けた私の課題であった。ちょうどその頃、日本では文部省の指導で初等中等教育レベルでの国際理解教育、学校間の国際交流を促進する動きが始まっていた。

そこで私は、セスラー先生にそれまでの千葉県の小学校との交流をあきらめてもらい、改めて私が少年時代を過ごした群馬県大胡町の小学校と結びつけることを考えた。幸い大胡町の学校の方も文部省の指導のこともあつて、校長も担当の教員も私の提案を快諾してくれ、1997年から両校の交流が始まった。



この交流を始めるに際して、過去の失敗例から私が考えたことは、双方の担当の先生をサポートし継続的にこれを進める態勢を作ることであった。最初の1～2年は児童の作品や学校生活のビデオの交換など実績作りに専念した。それがある程度定着したところで、いよいよメナーシャ側から支援態勢作りにとりかかった。というのは、メナーシャ地区は1992年から初等中等教育レベルでの世界言語プログラムの策定を検討するなど、言語によるコミュニケーション、文化交流に強い関心を持っており、クロビス・グローブ小学校の日本語教育もその一環としてなされていたからである。1999年、セスラー先生と私は作品等の交流の実績をふまえ、学校区の教育次長、クロビス・グローブ小学校の校長先生、そして同じ学校区で日本語の授業を行っているもう一つの小学校の校長先生の3人に交流校訪問、教育事情視察を目的とする日本訪問を呼びかけた。百

## ■ 伊藤幸男(いとう・ゆきを)

1935年大阪市生まれ。戦災孤児となり、47年浜松の戦災孤児収容施設に入る。その後、群馬県大胡町で「鐘の鳴る丘少年の家」の建設に従事。57年明治学院大学を中退し、米国のウィスコンシン州にあるローレンス大学に入学。61年同大卒業後、公立高校でスペイン語教諭として31年間教壇に立つ。この間、米国籍を取得。85年州教育庁の要請で公立高校内に日本語科を設置、日本語教育にも携わる。92年ウィスコンシン州教育庁長官付特別補佐官。93年より全米州教育庁長官連合協議会国際局・日本担当代表。日米間を年十数回行き来して、日米の教育長や学校の交流、米国における日本語教育の普及に努めている。

聞は一見にしかず、である。初めて訪問した日本で、学校のみならず町の人たちとの出会いを含めて、先生方が交流の重要性をより強く感じたことは、想像に難くない。

一方、メナーシャ側の訪問を受けた大胡町側も、これまでの学校交流を陰で支えてきた大胡町の教育長が町長、町議会等に働きかけ、答礼の意味を込めて翌年8月に町長、町議会議長、教育委員会事務局長、中学校長、引率教師1名そして中学生13名がメナーシャを訪問した。中学生13名の訪米は、学校交流を人的交流に高めたいという大胡町側の願いから実



現したもので、ホームステイを経験させることが目的であった。この訪問により、これまでの小学校同士の交流に加えて、大胡中学校とメナーシャのメイプルウッド中学校との姉妹校関係も成立した。特に大胡町の場合、町当局幹部の訪米により交流推進の気運は強化され、交流のための予算が町議会で承認されるに至った。2002年8月にはメナーシャ市と大胡町は地域同士の姉妹関係を締結することになったが、この姉妹関係が交流の積み重ねにより成立したという点が、冒頭の泉州姉妹関係と違うところである。

このような相互交流は、特にクロビス・グローブ小学校にとっては、日本語を勉強する子どもたちが中学生、高校生になったとき日本に行けるという、日本語学習への大きな動機付けになっているに違いないと思う。今年も6月にメナーシャから先生と中高校生7名が来日し、10月には大胡町が訪米することになっている。

## 交流の主体は学校だけとは限らない

このメナーシャ市と大胡町の交流の体験をもとにして、今二つの日米交流のプロジェクトが進行している。

一つは都立大崎高校のケースである。大崎高校の事務長を通じて話があり、アメリカのPTO(保護者会)調査のため、PTAの方々をアメリカの学校へ案内したことがあった。そのPTAから、会の積立金の有効な使い道として、毎年何名かの在校生にアメリカ訪問を体験させたいので相談にのってほしいという話があった。この事業についてはPTAが責任を持ち、毎年続けていくとの意思確認もなされたので、メナーシャ市の高校と、かつて私が教鞭をとったフランクリン高校(ウィスコンシン州)に受け入れを引き受けてもらい、昨年、今年と2回の訪米が実現している。またアメリカから中高校生が来日した折には、PTAが中心となって受け入れ、ホームステイなどお世話していただいている。

もう一つは千葉県富里市とウィスコンシン州のメクオン市のケースである。ウィスコンシン州のミルウォーキーで毎年開催されているアジアフェスティバルに、1999年、富里市のある合唱団が参加し、ミルウォーキーに隣接するメクオン市でホームステイなどを体験した。これが契機となり、この合唱団の子どもたちが通う小中学校から交流希望の話が持ち上がり、滞米中合唱団の世話をした私のところにその話が持ちこまれた。何回かの話し合いの結果、前述のように継続性を考慮して、富里市の場合は、交流の運営の主体を富里国際交流協会にお願いすることにした。同時に協会の働きかけにより、市当局および市教育委員会のサポートも得られるようになった。

現在、協会の選考により市内の三つの中学校から毎年10名の生徒が訪米し、レイクショア中学校の生徒のお宅でホームステイをさせていただいている。アメリカ側はメナーシャ市同様、学校が運営の母体となっているが、市や教育委員会の協力態勢もできあがり、近いうちにメナーシャ市と大胡町同様、地域同士の姉妹関係が誕生するものと期待している。

生まれて初めて行く他国でのホームステイ。期待と、そしてそれ以上の大きな不安——出発時の子どもたちの共通した感じである。そしてわずか数日のホームステイ。別れの時は抱き合い、涙、涙というのがいつもの情景である。ことばでは十分には話せない子どもたちが、心では十分すぎるくらいの話をしているのだ。私はこの光景を見るたびに、子どもたちの純粋で豊かな

感受性に驚き、大きな喜びに包まれる。私がこうした交流を橋渡しすることで、私を育ててくれた日本と、高等教育を受けさせてくれ、若い人たちの成長の現場に立たせてくれたアメリカに

何らかの形で恩返しができるとしたら本望である。そして、子どもたちのためならばと、いつも労を惜しまず協力してくれる日米の善意の方々に感謝している。

## 交流を継続させ、豊かにするための私の留意点

前述したような経過で、現在学校を核とした三つの交流のお手伝いを行っているが、その継続性と、教育的な見地からどのような点に留意しているかをまとめてみよう。

まず継続性ということからは、

- ①中心となる学校双方に、相手側ときちんと対応のできる担当者がいること。
- ②上記の担当者をサポートする管理者を含めて、学校内での協力態勢ができていくこと。
- ③特に日本の場合、先生方の勤務制度などから考えて、恒常的に交流に協力できる、あるいは直接担当できる態勢を作りだすための学校以外の場、教育委員会や町(市)当局、あるいは地域の国際交流に関心のある個人や団体等に、交流の意義を認識してもらう方法を考える。たとえば、交流訪問の際に、しかるべき立場の人に同行してもらい交流の意義を肌で感じてもらうことによって、学校同士の点と点の結びつきを、行政や地域も含めた面と面の結びつきに広げ、関係をより強固なものにする。
- ④そして、今回述べてきたケースについては私とその役割を担ってきたわけであるが、双方の事情に通じていて、交流が軌道に乗るまでのある期間、具体的な推進役をはたせる人がいること。

以上が交流を継続させるための必要条件であると思う。

次に交流の内容についてだが、生徒の作品等の交換から始まったとしても、子どもたちを中心とした人的交流が最終目的であり、そのために私が考えたのが、次の2点である。

- ①子どもたちの滞在は原則としてホームステイとする(ホームステイは、じかに子ども同士が寝食をともにすることによって、たちまち親密さを深め、家族とはもちろん、その友人たちへとコミュニケーションの輪が広がっていく、といった貴重な人間関係を作る場となる)。
- ②訪問先の学校が休暇中でないときを選ぶ(ホームステイ先の子どもと一緒に登校して学校の授業に参加できる。ウィークデーは子どもを預かる家庭の両親が日中仕事に出るケースが多く、子どもの面倒を見ることができない)。

相手先の休暇中を避けるということ考えた場合、アメリカは6月上旬には夏休みに入るので、7月半ばすぎまで授業を行っている日本を訪問することは十分可能である。日本からの場合

は、自分たちの学期中に訪問しなければならないケースが多くなるが、最近では教育委員会等の行政関係の理解も深まっており、認められる傾向が強まってきている。

これまで日米の交流について纏々述べてきたが、中心となるのは学校であっても、周囲の協力、サポートの如何が交流成功の大きな鍵を握っていると痛感している。

### ■大胡町・メナーシャ市交流年表

1997年9月	大胡小学校、クロビス・グローブ小学校間で児童の作品、学校生活のビデオ等の交換に関する合意書に両校の校長が署名。事実上の姉妹校関係開始。
1999年10月	メナーシャ学校区を代表して教育委員会次長および小学校長、日本語教師が大胡町を訪問。
2000年8月	大胡町長、町議会議長、教育委員会事務局長、大胡中学校長、引率教師および中学生13名がメナーシャ市を訪問。大胡中学とメイプルウッド中学との姉妹校関係成立。
2001年6月	メナーシャ市長、教育長、小中学校の日本語教師および22名の中高生が大胡町を訪問。町市間の姉妹関係樹立構想が浮上。10月、大胡町教育長および大胡中学教師が、同時多発テロに対する子どもたちからのお見舞いの手紙と千羽鶴を持ってメナーシャ市を訪問。
2002年8月	大胡町長、町議会議長、中学教師2名および中学生15名がメナーシャ市を訪問。町市間の姉妹都市関係締結文書に両自治体の首長が署名。
2003年6月	クロビス・グローブ小学校の校長、事務長およびメナーシャ学校区の日本語教師3名が来日。SARS発生のため、生徒の訪問は中止。9月、大胡町教育長、中学教師2名、中学生11名および町民グループ10名がメナーシャ市を訪問。
2004年6月	メナーシャ市より教師4名、中高生7名が、7月にはメナーシャ市長が大胡町を訪問。10月には大胡町から引率教師2名、中学生11名がメナーシャ市を訪問予定。

## 教室では見えなかった生徒たちの素顔と能力

米国ウィスコンシン州クロビス・グローブ小学校教諭  
リン・セスラー



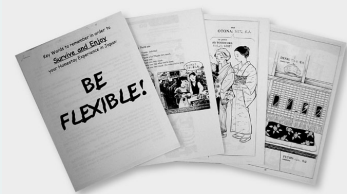
「あれは何なのかしら。一体どう使うの?」。メナーシャから十数時間の旅ののち、初めて踏んだ日本の地、成田空港で、一騒動持ち上がった。原因は空港にあった和式トイレだった。

22名の生徒たちは幼稚園から小中高校と日本語を勉強してきたが、これから始まる2週間は、これまで見たたり聞いたことのない多くの事に出会うのではないかと、改めて私は思った。その予感は見事に的中し、彼らばかりでなく、教師である私にとっても新しい発見の旅となった。

何回かのホームステイ。日本の子どもたちと一緒に学校生活。日頃アメリカの教室では目立たない生徒が、知っている限りの日本語を並べて積極的にコミュニケーションをはかっている。反対に教室のなかでは優等生の生徒が、失敗を恐れてか日本語を使わず、自分たちの日本語より達者な日本の子どもたちの英語に助けられ、コミュニケーショ

ンの場合は英会話教室となってしまった。ふだん教室での成績を優先しがちな私たち教師にとって、本当の評価とは何なのかが問われる光景であった。

移動を重ねるにしたがって、不安そうだった生徒たちが、日に日に充足感に満ちた顔になっていくのがわかった。メナーシャの人たちと同じように、日本の人たちもやさしかった。無事旅を終え、一回り大きくなって、迎えに来た親たちと帰る生徒たちの後ろ姿を見ながら、「やった!」と私は思わずつぶやいた。彼らも心の中で言っていたに違いない、「やった!」と。



日本研修ツアーの  
事前研修(p. 6参照)で  
使用している教材。

## 学校との連携を大切に

大崎高等学校PTA会長  
大橋悦子



PTA主催による海外の高校との国際交流は、東京都では初めてのケースだそうです。具体的に行っていることは次のとおりです。

①事務局の設置、②参加希望者を全校生徒から募集し、面接により決定、③オリエンテーション(3回)、④英会話講習(5回)、⑤アメリカの先生との連絡、⑥結団式、報告会の開催、⑦PTA総会での事業報告と会計報告、⑧(海外から研修旅行にきた高校生の)ホームステイ受け入れ期間中のお世話、など。

この活動は、学校と緊密な関係をとることが大切です。書類なども先生をおして生徒に配布していただき、学校の年間予定に合わせて訪米日程の決定や、受け入れの際の学校訪問の時期・方法等についても理解と協力を得るようにしており、結団式等にも校長先生はじめ先生方に出席していただいています。PTAのメンバーは子どもの成長とともに代替わりしていきますが、子どもたちの「楽しかった!」「また行きたい!」という弾む声が聞けるかぎり、保護者の同行によるこの活動をこれからも続けていきたいと考えております。

## 視野が広がる、自分を見直す

富里国際交流協会会長  
河野昌子



ホームステイ体験ツアーはすでに4回を重ねています。富里は成田に隣接しているため外国人が多く、協会では外国人のための日本語講座や日本語教師育成講座、市内小学校への国際理解出前講座、子どもの英語教室などの活動を行ってきましたので、ホームステイ体験ツアーを提案したとき、すぐに教育委員会の理解が得られたのは幸いです。

市内の三つの中学校の2年生を対象に、学校をとおして募集します。協調性があり自分なりの意見をもっていること、学力は問わないことを条件にして、協会が面接と作文等で10名選びます。

ほとんどの生徒は渡航経験がないため、ホームステイに対し期待と不安をもって現地入りしますが、すぐにアメリカの子どもたちのなかに溶け込み、ことばよりもむしろ心を通じて親しくなります。短期間のツアーであっても、日本と異なる家庭生活、学校生活、文化や習慣を体験することによって、視野が広がり将来のことを考えるようになります。

帰国後は英語に対する見方も変わります。ほとんどの子どもがメールのやり取りを続けているようですし、第1回ツアーの3人の子ども(現在、高3)が、海外に留学しています。

# メナーシャ 2001日本研修ツアー

参加者：中高生22名(男子4名、女子18名)  
随行者：日本語教師3名、メナーシャ市長、同教育長夫妻

### ● 研修ツアーの目的

- ①日本の中高校クラス参加、②ホームステイ経験、③日本の自然に触れる、④東京探訪、⑤広島・爆心地訪問、⑥新幹線に乗る、⑦日本語の実地研修、など

### ● 参加資格

8～12年生で、日本語クラスで少なくとも「C」(中程度)以上の成績をとっていること。

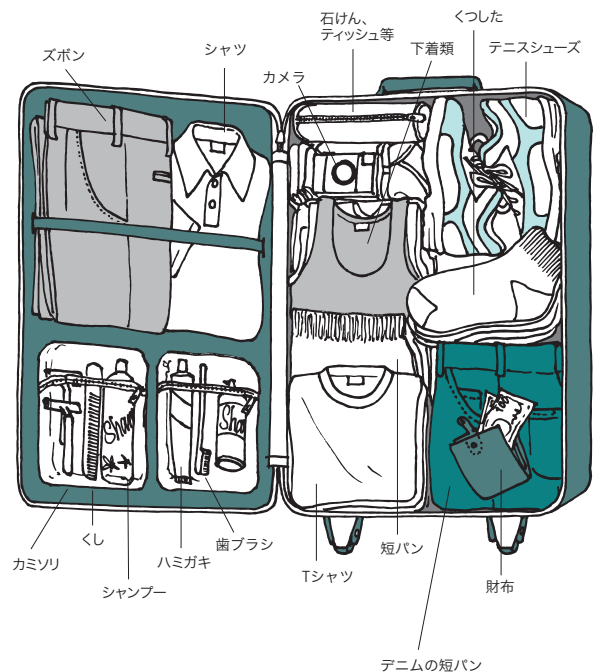
### ● 事前研修

5回の課外授業(1回1時間)で、あいさつなどの日常会話のほか、日本の生活や文化について教える。

### ● ツアー行程(14泊15日)

- 6/14(木) シカゴ出発
- 6/15(金) 東京・成田空港着→大阪・伊丹空港着→ホテル泊
- 6/16(土) 電車で御坊と紀伊田辺へ。和歌山でホームステイ
- 6/17(日) ホームステイ先の家族と終日過ごす
- 6/18(月) ホームステイ先の生徒とともに学校訪問。ホームステイ
- 6/19(火) 電車・新幹線で広島へ。広島平和記念館見学。ホテル泊
- 6/20(水) 新幹線で東京へ。東京でホームステイ
- 6/21(木) 東京タワー・隅田川・浅草。ホームステイ
- 6/22(金) 電車で大胡へ。大胡でホームステイ
- 6/23(土) ホームステイ先の家族と終日過ごす
- 6/24(日) 同上
- 6/25(月) ホームステイ先の生徒とともに大胡中学訪問。ホームステイ
- 6/26(火) バスで軽井沢、草津へ。ホテル泊
- 6/27(水) 水泳・ハイキング・草スキー・温泉・買い物など。ホテル泊
- 6/28(木) バス・電車で東京へ。成田空港発→シカゴ空港着

### ● 研修旅行報告会(参加生徒、父母、随行教師)



### 旅行中の心得

- できる限り日本語を使え。
- いつも、笑みを忘れずに。
- 寝る所はきちんと整理し、後片付けをすること。
- 贈り物もらったときは、必ず“Thank you”を。
- 食卓にでたものは、できるだけ食べるように。
- 長時間、浴室を独り占めしないこと。
- 靴をはいたまま家の中に入らないこと。
- 部屋にこもりきりにならないこと。



### ツアーの費用(生徒1人当たり)

1,668ドル=約18万3,000円  
 ▶航空運賃、ホテル代、食費等。鉄道は2週間の外国人用JRバスを購入。父母より2,000ドルあずかり、終了後332ドル返金。

生徒が持参した小遣い:300ドル以内

# 富里 第4回アメリカ・ホームステイ体験ツアー(2003)

イラスト: アサミカヨコ、大島輝彦 (p. 6下スーツケース)



参加者: 中学生10名(男子4名、女子6名)

随行者: 富里市教育次長、富里中学校教諭、富里国際交流協会会長、同副会長

● スケジュール

- 7/10(木) ホームステイ参加者募集開始
- 7/25(金) 締め切り。富里中、富里北中、富里南中の応募者40名
- 8/12(火) 応募者生徒面接
- 8/17(日) 同上
- 8/18(月) 同上
- 8/22(金) 合格者に通知
- 9/23(火) ホームステイ事前研修(アメリカの訪問州、ホームステイ、日常会話など英語の勉強)
- 10/5(日) 同上

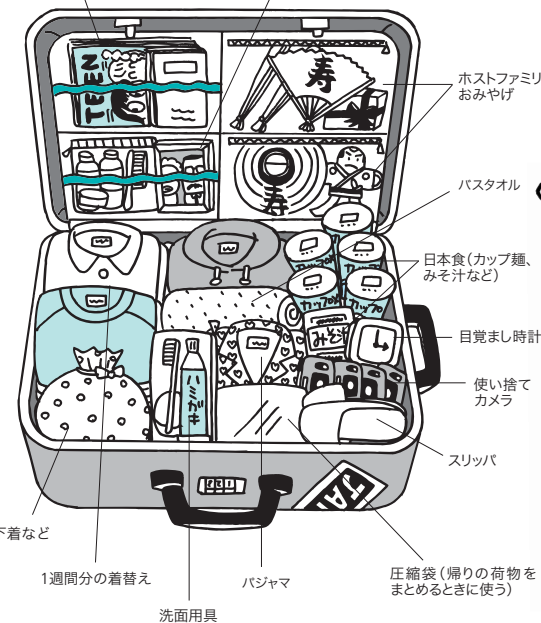
● ツアー行程(7泊8日)

- 10/10(金) 成田空港発
- 10/11(土) シカゴ空港着 シカゴ見学後メクオン市へ ホームステイ家族との対面式後、各ホームステイ先へ
- 10/12(日) ホームステイ先の家族と終日過ごす
- 10/13(月) Aグループはレイクショア中学校を見学、授業参加の後、中学8年生学年歓迎会とシーズビル村(メクオン市)村長による記念品贈呈式に出席。Bグループはステファン中学校を見学、授業参加。ホームステイ
- 10/14(火) Aグループはレイクショア中学校の野外授業に参加。Bグループはステファン中学校の授業に参加の後、中学校歓迎会とシーズビル村長による記念品贈呈式に出席。ホームステイ
- 10/15(水) 各中学校生徒と別れ、シカゴへ。ミシガン湖畔散策、買い物など。ホテル泊
- 10/16(木) シカゴ空港発
- 10/17(金) 成田空港着

● 体験ツアー帰国報告会(参加生徒、父母、市教育長、各中学校長、富里国際交流協会など)

日本のファッション雑誌など

家族の写真



ホストファミリーへのおみやげ

バスタオル

日本食(カップ麺、みそ汁など)

目覚まし時計

使い捨てカメラ

スリッパ

下着など

1週間分の着替え

パジャマ

圧縮袋(帰りの荷物をまとめるときに使う)

洗面用具

ツアーの費用(生徒1人当たり)

富里: 11万2,600円

▶うち参加費6万円、残りは富里国際交流協会が援助。

大胡: 約24万円

▶うち参加費10万円、残りは大胡町が援助。

大崎: 15万5,000円

▶これ以外の、英会話講師料などはPTAが負担。

※費用は時期、期間、滞米中のスケジュールで異なる。

生徒が持参した小遣い: 1万~2万円

主なおみやげなど

● 折り紙、けん玉、だるま、凧、こま、あやとりなど、日本の情緒があり、一緒に遊べるもの。

● また、カレーや肉じゃが、親子どんぶり、みそ汁など、簡単な料理を作ってあげたり、家族や学校、遊びの写真など見せることも喜ばれ、話題作りに役立つ。

# 私たちが感じたこと——お互いの国を訪ねた生徒たちの帰国後の感想文から

ここに掲載した声は、ほんの一例に過ぎません。異なる生活や文化を目の当たりにした発見や感動もさることながら、彼らの心をもっとも捉えたものは、外国人であるホストファミリーや同世代の若者との暖かな触れ合いでした。そして、勉強としての英語(日本語)ではなく、さらに深く知り合うための手段としての英語(日本語)の大切さを知ったようです。

## お父さんのことば

初日。ホストファミリーがとても暖かく私を受け入れてくれて、ほっとしました。夕食はハンバーガーショップで、2日目。朝早くから家族みんなで、ボーダー湖にある別荘へ。昼過ぎに一つ年上のアッシュリーの運転でクルーザーに乗って妹のターシャと3人で湖を一周。お父さんのウォータースキーを見たあと、私も湖に入りました。3日目。お母さん、アッシュリー、ターシャと一緒に買い物に。4日目。中学校に行き、授業に参加。先生と生徒が友だちという感じで、明るく楽しい授業でした。とくにリーダーを決めず、クラス全体が話し合いで進め、みんな自分の意見をはっきりいうのに感心しました。5日目。高校見学。中学と違い日本語を話せる人が多くてびっくり。片言の日本語で「ぜひ友だちになりましょう」「好きなスポーツは何?」などと声をかけられ、たくさんの人と会話をしました。お別れの日。お父さんから「えみの家はここにもあるんだから、いつでも帰っておいで」といわれたときには、本当に涙が止まりませんでした。

金子絵美◎大胡中学校 [2003年]

## メナーシャの生徒たちから

- ▶ 汽車に乗れたことは、すばらしい経験だった。時間に正確、簡単に利用できるなど、あの体験は今も大きな思い出になっている。
- ▶ この旅行を通じて、自分で自分自身のことを処理できるようになったこと。いまさらながら、母親に頭の下がる思いがした。
- ▶ いかに限られた狭いスペースを有効に利用するか。アメリカではあまり関心がないが、もし自分も日本にいたら、空間利用の発想を持つようになるかもしれない。

★「メナーシャの生徒たちから」は2001年日本研修ツアーのもの。



## メナーシャの生徒たちから

- ▶ お寺に行き、隣の日本人と同じように、瞑想、お祈り、お線香焚きと、とても興味深い体験をした。そのときの様子や気持ちを、いつか歴史のクラスで紹介したい。
- ▶ 自分の人生の中で、これほど始終、人に見つめられた経験はなかった。それだけに、少数民族の人たちがわれわれの社会の中で、いつもそのような思いをしているのだということを思い知らされた。好奇心だけでなく、人はみな同じという感性を、私たちは持つべきだとこの旅で知った。



## お姉ちゃんができた

この旅行で出会った人たちを、私は一生忘れない。とくにホストファミリーの方々は、私を本当の家族のように扱ってくれた。クリスティンは1コマ上の女の子で、私が困ったり戸惑ったりしているのを察すると、いつも声をかけて助けてくれる優しい子だった。二人ともファッションに興味があり、お互いの国の雑誌を一緒に見て、これが流行っているんだよとか、この服かわいいねとかって、片言ではあるが、コミュニケーションをとることができた。ネイルアートもしてくれ、お姉ちゃんができたみたいでうれしかった。

樋田久美子◎大崎高等学校 [2002年]

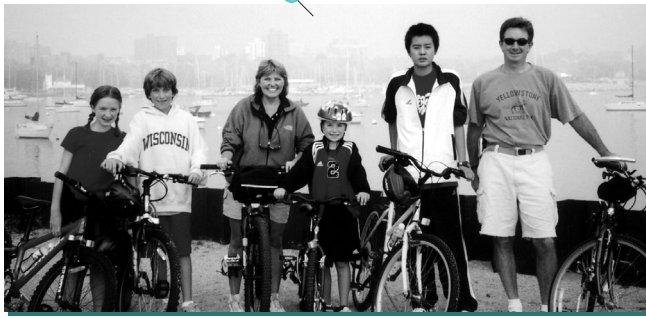
## 英会話は気楽に

アメリカに行って学んだことはとてもたくさんある。英語の授業では、Doで聞いたときはDoを使って答えると教わったが、向こうの人たちは、Doで聞くと、みんなYesかNoで答えた。Yes, I do. なんていう人は一人もいなかった。英語なんか聞き取ることができれば、答え方はいくらでもあるということを学んだ。でも、それがむずかしい。はじめの頃は何をいっているのか全然わからなかったけど、時間が経つにつれて、場の雰囲気などでわかるようになった。英会話は、むずかしく考えずに気楽にやってみようと思う。

斎藤瞬◎富里中学校 [2002年]







## 殻に閉じこもる日本人

日本に帰国して思ったのは、人々がムスツとして他の人に見向きもしないような態度に見えること。アメリカでは、いいたいことを体も使って表現する。見ていて気持ちがよく、自分も楽だった。ちょっとぶつかっただけで「Excuse me」とすぐあやまったり、店のレジで「Hi!」と声を交わすのは当たり前。家族の絆の強さも伝わってくる。日本ではあまりコミュニケーションがとれていないなと思ったし、帰国時にそれを実感した。電車の中でぶつかりそうになり、「ごめんさい」といおうとした私に、その人はすっと無言で去っていったのだ。日本にいるときは普通に思っていたけど、無神経さに驚かされた。みんなが自分の殻に閉じこもっているように見えた。

前山妃斗美◎大崎高等学校 [2002年]

## 何か居心地がよくて

学校では、すごく自由なのに、みんなしっかりしてた。みんな学校が好きそうに見えた。日本と教育システムが違うのかもしれない。何だろう。すごく居心地がよくて。そりゃあ、初日はみんなこっち見てくるし、振り返られるし、指さされもしたけど。2日目には、もうなかったし。みんなスゴイ親切で。日本語とか教えると、ソレで話しかけてきてくれて。個性が強い。先生のいつてるコトとか、辞書引いて教えてくれて。わざわざ前の席から、一番後ろまで来てくれる子もいて。うれしかった。男の子も女の子もカワイイし、こっちの学校に通いたいくらい。日本は少し縛り過ぎなのかもしれない。だから今、少年犯罪とか増えてて。子どもだって考えられるのに。縛られるからムカついて、その分それを断ち切ろうとする。少し、アメリカのシステムが羨ましく思えた。あそこでなら、心広く生きられるような気がした。

横地菜摘◎富里北中学校 [2001年]



## 心でスルーパス

エミリーと体育の授業でサッカーのパス練習をしたとき、私が失敗すると、彼女は笑ってなごませてくれたり、うまくいったときには一緒に喜んでくれたり、なんだか心で会話している感じがしました。とてもうれしかった。「ことばの壁」があっても心で分かり合えるということを知りました。

小池茜◎大胡中学校 [2003年]

## だいぶ違う学校生活

スクールバス、カフェテリア、個人ロッカー、授業ごとに大急ぎで教室を移動することなど、僕たちの中学校とだいぶ違う。ジーパンにTシャツ姿が多く、服装は自由、アクセサリーやピアスをした女の子もいて、校則などあまりないようだ。日本のような上下関係など全然ない。下級生も上級生もとても仲良しで、みんなとても暖かく自由な雰囲気だった。しかし、授業中の態度はすごかった。私語はない。先生が話しているときは静かで、質問されるとクラスのほぼ全員が手をあげて発表するなど、とてもまじめで積極的だった。僕たちも学ばなければいけないと思った。

吉田悠人◎富里中学校 [2002年]



## 私が作ったうどん

日曜日の夜にはホストファミリーの家におばあちゃんもいらして、みんな私の作ったうどんを食べてくれました。口に合わないと言ったので、私ははじめ心配で箸が進まなかった。しかし、「美味しい」「美味しい」と奪い合って(ちょっと言い過ぎだけど)、全部食べてくれた。とてもうれしかった。

三浦千春◎大崎高等学校 [2002年]

## メナーシャの生徒たちから

- ▶ 日本の食事はバラエティに富んでいて、それらを盛りつけるのにたくさんの器が使われていることに驚いた。
- ▶ なんて日本の人たちは親切なんだろう。そして、よく物をくれる人たちが。何かすまない気持ちで一杯だ。
- ▶ アメリカと同様、大都会はそんなに変わらないと思う。そんな中で、日本では今と昔が入り混じっており、その調和に感心させられた。例えば、着物を着た女性の横に、バンクロック風の若者たちがたむろし、その2種類の人たちが何事もないかのように、同じ電車の中に吸い込まれていく。とても不思議な光景だった。

## 家族の光景

家族同士でよく話をする。もちろんカークもだ。学校でのこと、テレビのこと、友だちのことなど。日本ではこんな光景を見たことがない。宝物のように家族を大切にしている。僕は親とあまり話さない。話しかけられても、「別に〜」とか「知らない」などと話そうとしない。食事中もテレビを見ながら黙って食べる僕の家とは違う。そんな彼らを見ていたら、急に恥ずかしくなった。

笠原崇◎大胡中学校 [2000年]

TJFの事業

# 中国語を学んだ高校生の中国訪問

## ——高校生交流代表団

TJFは、高等学校の中国語教育事業を進める中で、中国語を学んだ高校生の学習意欲を高めるために、2000、2001年度に高校生のための中国研修旅行を企画しました。また、より多くの中国語を学ぶ高校生に中国に行く機会を提供したいと考え、他機関に働きかけを行ってきました。

「日本高校生交流代表団」の派遣は、1998年11月の江沢民中国国家主席が来日した際に日中両国政府が取り決めた「青少年交流の一層の発展のための日本国政府と中華人民共和国政府との枠組みに関する協力計画」に基づくプログラムで、社団法人日本中国友好協会が2000年から高校生を中国に派遣する事業に取り組んでいます。

日本中国友好協会に働きかけてきた結果、2003年度の第4次派遣から、中国語学習者枠20名が設けられ、TJFが募集を担当しました。2003年度の募集対象地域\*の31校から37名の応募があり、最終的に20名の団員を選考しました。

TJFは、プログラムや事前研修の企画にも協力しました。中国滞在中のプログラムを提案するにあたっては、①中国の人と彼らの生活に出会う、②中国の歴史や伝統文化に出会う、③中国の今に出会う、という3点を考慮しました。歓迎や送別のレセプションや交流校での代表挨拶など、中国語学習者が、日頃の学習成果を発揮する場面をできるだけ多く設定するようにしました。

また、中国滞在中の7日間が楽しく、ためになるものになるよう、以下のことも実施しました。

- ① 事前研修時に、班ごとにテーマを決め、調べた内容を出発直前の第2回事前研修で発表する。  
テーマ：日中戦争／京劇／瑠璃廠／故宮・万里の長城
- ② 現地で使う頻度が高いと思われる中国語会話を練習してもらうため、会話を録音したテープを渡す。
- ③ 写真と自己紹介のためのポストカードをそれぞれが作成し、事前にホストファミリーに送る。
- ④ 出発までの間に、定期的にメールで現地に関する情報を発信する。

\*北陸、東海、関西、中国・四国、九州・沖縄ブロックから28府県

### 代表団に同行して

3月28日、TJFが募集した中国語学習者枠で参加した20名を含む46名の高校生とともに、北京へ向け出発しました。中国で過ごした6泊7日は、一日にいくつものプログラムが盛り込

まれている日もあり、少々ハードスケジュールの旅となりました。

習った中国語が通じるのか、最初は不安もあったと思いますが、訪問先では、生徒代表が立派な中国語で挨拶をしてくれました。だんだん慣れていくにつれて、みんなにも余裕ができて、旅を楽しんでいました。帰国前夜には「中国の友だちとも、この1週間を一緒に過ごした日本の友だちとも別れたくない」「また必ず中国に来たい」と全員が涙を流しながら、そう繰り返していました。

右頁に紹介するのは、代表団に参加した高校生の感想文の一部です。彼らがどんなことを感じたのかを伝えてくれていると思います。

(水口景子)



「中国中学生報」の学生記者との交流の様子が掲載された紙面。



歓送会で、肩を組んで歌った「さくら」。この時の感動はきっと忘れない。

## 第4次高校生交流代表団

派遣： 外務省  
 受入： 中華人民共和国教育部(日本の文部科学省に相当)  
 実施： 社団法人日本中国友好協会  
 協力： 財団法人国際文化フォーラム  
 団員： 一般募集枠 26名(日中友好協会募集)  
 中国語学習者枠 20名(TJF募集)  
 団役員・教員・看護師・通訳および事務局計7名  
 期間： 事前研修① 2004年2月14日(土)～15日(日)  
 事前研修② 2004年3月27日(土)  
 中国訪問 2004年3月28日(日)～4月3日(土)  
 訪問先： 北京・上海

### 中国滞在中の主なプログラム

- 1日目** 関西空港から北京へ ⇨ 長安大劇院で京劇「白帝城」鑑賞(開演前に舞台裏で俳優さんが化粧をしている姿や衣装などを見学。中国京劇院の副院長から京劇の歴史についてレクチャーも受けた)
- 2日目** 盧溝橋抗日記念館見学、北京民族職業高級中学の生徒と瑠璃廠散策、教育部表敬訪問 ⇨ 歓迎会(日中それぞれが出し物を披露。日本側はソーラン節、男女十楽坊、二人羽織、合唱を披露)  
 ★希望者のみ、中国京劇院所属の京劇俳優である石山雄太氏から話を聞く。
- 3日目** 北京市第十三中学訪問(英語、体育、美術、音楽、コンピュータの授業を見学) ⇨ 中国少年児童新聞出版総社訪問(中高校生向け新聞「中国中学生報」の学生記者と交流) ⇨ 日本大使館表敬訪問  
 ★希望者のみ、宿舎(大学構内)近くで早朝の太極拳練習を見学。
- 4日目** 天安門・故宮・万里の長城を見学した後、空路上海へ
- 5日目** 上海市甘泉外国語中学で一日中国人生徒になる(中国語、音楽(民族楽器紹介・体験)、体育(中国武術練習)の授業を受ける) ⇨ ホームステイ
- 6日目** ホストファミリーの生徒と上海市内散策 ⇨ 歓送会・解団式
- 7日目** 帰国

### 交流代表団参加生徒の感想

#### 習った中国語が使えた

■僕は2班の班長として、教育部の方々とお会いしたとき、あいさつをしました。僕は高校で中国語の授業を選択し学習していたので、考えた文章を通訳の鳥生さんに中国語に訳してもらい、中国語であいさつをしました。めちゃめちゃ緊張しました。足がガクガクし、紙をもっている手はブルブルふるえ、ことばも思ったように出ませんでした。けれど読み終わったあと、教育部の方にとっても上手だね、と褒めていただいたときは本当にうれしかったです。……濱田洗一

■北京のホテルに到着し、部屋に入ろうとしたら鍵が壊れていて中に入れません。さっそくのトラブルにすごく動揺しました。しかし、1年間中国語を頑張ってきた自分の実力を信じて、ホテルの人に初の中国語会話の実践をしてみました。すると私の言っていることが、しっかり伝わったらしく、新しい鍵と交換してもらえました。この時、これからの1週間、何だかうまくやっていけそうな気がしました。……林ゆき

#### 勉強不足を反省

■私はといえば中国語を少し分かる程度な上に、もちろん英語はほとんど活用できず……。3日目あたりで「英語やらなきゃ」と焦ってしまいました。ちゃんと勉強しておけばよかったとの時ほど後悔したことはありませんでした。……路真由美

■後悔したのは、もっと中国語を勉強しておくべきだったということです。

中国語が話せれば、英語も日本語もできない高校生とも話せたとし、ホームステイ先の家族にも、感謝の気持ちをたくさん伝えられたのにと本当に後悔しています。……原尻美穂

#### 観光旅行ではできない体験

■交流代表団のスケジュールには、観光ではできないことが多かったのです。《京劇のリハーサル・見学》——京劇を観ることがあったとしても、そう簡単に舞台裏なんて見せてもらえるわけではなく、とても貴重な体験でした。《中国人民抗日戦争記念館》——日本がどれだけ卑劣なことをしていたのか、思い知らされました。今このように、交流を深めていくことがとても必要なのだと感じました。……御手洗由香

■今回、普通の観光ではできないような体験ができてホントよかったです。ホームステイもできたとし、中国の高校の授業も一緒に受けることができ、かなり充実した1週間だと感じた。……澤田悠一

#### 一番楽しかったホームステイ

■上海でのホームステイでは、お父さんはいつも笑顔を向けてくれ、お母さんは出かける時ずっと私の手を握ってくれました。お父さんのやさしい笑顔とお母さんの温かい手の感触は今でも覚えています。私と同年の艶文も私を喜ばせようといろいろな話をしてくれました。……吉井智栄

■ホームステイ先に行ってみて、最初に思ったのは、「なんでお母さんが3人もいるの!」。実はおばさんが二人いただけで、お母さんは日本と同じで一人だけ。一人っ子政策もあるから、一人の子を親戚みんながとつても大切に育てていて、見ていてとても温かいものを感じました。……油野かおり

#### 出合いと別れ

■今回、いちばん心に残ったのは、たくさんの日本の友だち、中国の友だちを作れたことと、どんなことにも出合いがあれば別れがあるということでした。北京、上海での友だちとの別れ、そしてずっと一緒に行動してきた友だちとの別れ。あれほど目頭が熱くなった思いはこれからも絶対に忘れません。……江見徹矢

■歓送会の最後に二人の学生が森山直太朗の「さくら」を歌っていた時のことです。みんな、何て言うか……。嬉しい気持ち、感動など、ことばでは言い表せない感情が込み上げてきて、次々にみんなが歌に加わっていった、全員で肩を組んで歌いました。私はこのことを一生忘れないでしょう。こんなにもたくさんの人たちに会えて、短い期間だったのにめもかかわらず、ものすごく深い絆が生まれました。……林ゆき

#### 中国を訪問してわかったこと

■私は中国の人々に「日本人のことを、日本国に属する一人ではなく、地球に住む一人の人間として見てほしい」と伝えるつもりでした。しかしホームステイ先の友だちは、私にこんなことばをかけてくれました。「日本は昔中国にひどいことをしました。私はとても傷ついています。昔の日本の軍国主義とあなたたち日本人とは別だということを信じています。」「国」というものさしで人間を見ているのは、本当は自分の方なんだということに気づかされました。……中尾恵

■今回の中国訪問で、忘れていけないのが中国人民抗日戦争記念館です。正直、日本はアメリカに原爆を落とされ、戦争での被害者というイメージが強かったのですが、その考えはくつがえされ、日本は加害者でもあるということが分かりました。……仲井大祐

■「中国人の若者の70%が日本を大嫌いだ」という話を聞きました。でもそんな統計をとっても何もいいことはないと思いました。好きとか嫌いとかは、一人の人間として付き合っ初めて生まれてくる感情だからです。今回の中国への訪問で、私たちは日本人、中国人なんて関係なく、本当に素晴らしい時間を共有できました。……葛宮子

## 見る聞く考えるやってみる授業 —— 24

## “普通の学校”の国際理解授業

——参加型授業で1年間をとおしてみたら



東京都立久留米西高等学校教諭 中山滋樹

## 1 「『総合的学習』、それはたいへんだ!」

勤務校での2001、2002年度の3年生選択講座「国際理解」(週2時間)は、2003年度からの新カリキュラムへの移行に伴う総合的学習の導入に備えて、本実施の前に試行した授業の一つです。この移行が教育現場を困惑させたのは、「総合的学習の時間枠では、全く新しい手法・内容で長期の授業を行うはずなのに、そのための人も時間も用意されていない」という点でした。そのような中で、普通の公立高校で、普通の教員が、一般教科の授業もやりながら行った例として今後の参考になればと思います、1年間の授業記録を作りました。本稿では、この授業記録の概要を報告します(詳細はホームページで公開中。右頁参照)。

## 2 「何を、どうする?」

国際理解の授業を行うにあたり、①基本方針を本当に平和のためといえる教育をする、②参加型の学習を行う、という2点に絞りました。国際理解教育が「人の心の中に平和の砦を築く」(ユネスコ憲章前文)ことを目指すならば、何よりも平和のための教育を行おう、そのためには、他者を大切に作る姿勢を育てることから始めようと考えたのです。

したがって、生徒が単一的なものの見方を乗り越えることを重視し、偏見やステレオタイプに気づき、他者を受け入れる経験をさせるようにつとめました。その結果が、右頁にある1年間の授業展開です。

また、平和を目指す市民としてあるべき態度や姿勢を育成するには、生徒に知識を覚えさせるのではなく、小さな実体験をさせて、考える経験を積み重ねさせることが望まれます。そのためには、講義型授業を最低限におさえ、参加型の学習という方法を用い、生徒自身が気づき、考え、意見を交換し、互いに協力しあう状況を作るようにしました。参加型の授業には、生徒が積極的に参加できるような準備が必要であり、次の2点をその基本としました。①小さな身近なものから大きく遠くのものへ視野を広げさせる、②授業やアクティビティーの一つひとつに、前後と意味のあるつながりをもたせる。

最初は身近でわかりやすいことから始め、最後に全体が大きな生き物のように不可分で、有機的につながっているという

感覚を生徒に持たせようと思いました。それが、自分自身と社会全体のつながりを感じることもなるはずです。

年間の授業の流れは、第1期「自分自身や、自分とまわりの人との関わり方について考える」から第5期「知識・情報と自分を結びつける」まで各段階を踏んでいき、最後にまとめとしての創作活動を行いました。

## 3 「さあ、教室!」

参加型学習には決まった形態があるわけではなく、内容にあわせて“場”を作ることになります。授業は、しばしば生徒の並び方、机や空間の配置を変えて行いました。生徒同士が全員の顔を見られるように輪にしたり、二人のペアや4人ずつのグループをつくったり、クラスを半分に分けたり、といったぐあいです。

その日のテーマにそって場を用意することは、参加型学習の授業の成否を大きく左右します。活動しやすくと生徒は自然に集中しますし、そうでないと教員の干渉なしには進まなくなります。毎回、授業の最後に生徒にコメントを書いてもらいましたが、集中できた日はコメントも充実し、教員が主導したような日はコメントが短くなるというはつきりした反応がありました。

年度末アンケートでは、この授業について、次のようなコメントがありました。「初めのうちは国際理解ってなんだろう、授業やっても意味あるのかなと思うこともありましたが、1年をとおしてようやくやってきたことがわかりました。すごく世界のことに目を向けたし話したと思います。みんなと意見を出し合うと、相手が何を思っているのかもわかるので本当によかったと思います」「人の数だけいろんな考え方があると思いました。考えさせられたのもありました。何か積極的になれた気がします」「この授業は聞いて、考えて、答えて、参加してためになる授業でした。今までに、あまりやったことがなかったせいか、私には難しくて大変でしたけど、学校を出て社会に出るとこういうことはとても大切なのかも、と思いました」「新しい自分を発見することができました」「毎回不思議な感覚でした」

授業中の発言も授業後のコメントも、実に面白いものが飛び出します。教員も新しい自分を発見しながら、不思議感覚を体験できる可能性があります。国際理解という分野は、まさに生徒と一緒に冒険する価値のあるものだと感じています。

## ■1年間の授業展開

## 第1期:自分自身や、自分とまわりの人との関わり方について考える

- 第1回 年間の展開の説明(『小』から『大』へ)と、アイデンティティについて
- 第2回 アイデンティティとステレオタイプ
- 第3回 人と人、関係の持ち方

## 第2期:自分と、身近な社会について考える

- 第4回 あっていい違い、いけない違い(『新しい開発教育のすすめ方』掲載「ちがいのちがいがい」を利用)
- 第5回 身近な偏見・ジェンダー問題

## 第3期:国際的なことまで、自分自身と結びつけて考える

- 第6回 世界各地の写真から読みとる(写真集『地球家族』を利用)
- 第7・8回 ビデオを見て考える その1・その2

## 第4期:実践と1学期のまとめ

- 第9回 カレーを手で食べてみよう



現地の人々と同じように調理し、食べることを体験してみる。インディカ米がカレーにあうことも実感。

- 第10回 1学期のまとめ ステレオタイプと偏見を打破する  
学期末アンケート
- 第11回 風土と文化

## 第5期:知識・情報と自分を結びつける

- 第12~15回 絵本『世界がもし100人の村だったら』を使って  
その1~その4
- 第16回 識字問題



ハングル文字の電車の切符を持ち、ハングル文字の山手線路線図を見て、目的地までの行き方と料金を考える。文字が読めないといくつもの不便があるかを体験する。

- 第17回 所得(開発教育協議会『一杯のコーヒーから』を利用)
- 第18回 日常生活と輸入品(神奈川国際交流協会「世界からやってくる私たちの食べ物」を利用)
- 第19回 多様な価値観(『地球市民を育む教育』掲載「価値観のオークション」を利用)

## 第6期:年間の学びを生かした創作活動

- 第20回 創作物語『よそ国』その1。基本情報調査とコンピュータ操作
- 第21回 権利
- 第22回 創作物語『よそ国』その2。基本情報調査と目的にあわせた調査
- 第23回 創作物語『よそ国』その3。これまでの調査を元にした物語作り 学期末アンケート
- 第24回 問題解決への努力、NGO等について
- 第25回 創作物語『よそ国』その4。物語の打ち込み
- 第26回 創作物語『よそ国』その5。物語の打ち込み、編集・校正、完成 学年末アンケート

## ■年間のまとめ:創作活動課題『よそ国』

生徒一人ひとりが、それぞれ架空の目的で世界各地に出かけると仮定し、各自が現地のことを調べ、実際に訪問するストーリーを作って報告するバーチャル・トラベル・レポート

手順:

- ① 国の調べ方、調べる事項(人口、面積、気候、民族、宗教、言語、産業等)を考える。
- ② 「行き先」カードを引く。自分が行く国を決める。
- ③ ①で考えたことをもとに、行き先の国の基本情報を調べ発表する。
- ④ 「入国目的」カードを引く。その国で何をするかを決める。
- ⑤ 引いたカードの目的にあわせて調査をする。

実際に生徒が引き当てた課題の例:

「スリランカへバンドのマネージャーとして行く」

「セネガルへ食べもの雑誌の取材に行く」

「ハンガリーへ現地の芸術を学びに行く」など。

- ⑥ 生徒による創作活動。ストーリーを作り、中間発表でアイデアを交換して仕上げる。

生徒の作品集(A4判で一人数ページから10ページ程度で、インターネットで入手した情報や現地の写真画像も掲載したストーリー)を冊子にして授業参加者に配り、修了・卒業記念とした。

自分が主人公となって活動する物語を創作することで、生徒が1年間の学習を自分のものとするをねらった。大作を書く生徒や、凝った展開を試みる生徒もいる。各ストーリーで、警察に捕まったり、美容院でびしょぬれになるなどいろいろな事件が起きたり、「リタさん」「ワンチャイくん」など創作上の人物が登場したりする。笑いや涙の物語に、明るい未来を感じた。

## ■生徒の作品から

「……セネガルにはタクシーや乗合バスなどたくさん車が走っていました。これで移動に困ることはなさそうです。街の人々はとてもオシャレで民族衣装もカラフルで綺麗でした。街を歩いていると、以前はフランスの植民地だったのでフランスパンのお店がたくさんありました。セネガルのパンは意外にとってもおいしかったです。また、街のいたるところにオレンジを売っている屋台がありました。それは、器用に皮が剥いてあって、街の人々は、それを食べたり、おしゃべりをしながら歩き、皮や種は、道へ捨てているようでした。どうしてだろうとっていると、そこら辺にいる山羊たちが食べるのです。……」

## 中山氏のホームページ(「国際理解」授業記録)

▷<http://blahblah.hp.infoseek.co.jp/02Sougoutop.htm>

E-mailアドレス

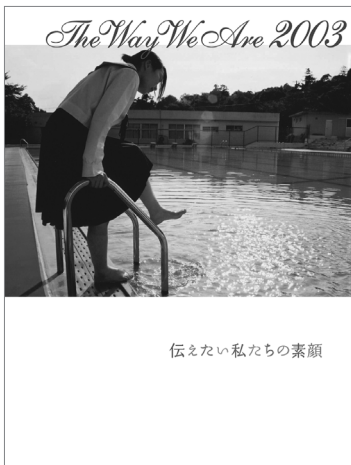
▷alex@ac.mbn.or.jp

# TJF ニュース

## 「高校生のフォトメッセージコンテスト」 写真集を発行、英語版のサイトをオープン

### ●写真集『The Way We Are 2003 伝えたい私たちの素顔』が完成しました

第7回高校生のフォトメッセージコンテストの入賞作品を中心にまとめた写真集『The Way We Are 2003 伝えたい私たちの素顔』(A4変型判、一部カラー、64頁、4,000部発行、日本語版)を7月初旬に発行し、コンテストの参加者や関係者のほか、海外の日本語教育現場や、日本の国際理解教育などの教育現場に配布します。



伝えたい私たちの素顔

コンテストに参加する高校生にとって、このコンテストは「写真を使った、他者理解や自己理解」に取り組む場になっています。友だちの姿、将来の夢、さまざまな悩みなど、参加者が作品に込めたさまざまな想いを、雑誌感覚の誌面で伝えています。

また今回は、6組の撮影者と主人公にインタビューをして、作品制作の際のさまざまなエピソードを紹介しています。作品紹介のページとあわせて読むと、より深く作品を理解し、登場する高校生たちの等身大の姿を知ってもらえると思います。

(藤掛敏也)

### ●新しい英語版ホームページがオープンしました <http://www.tjf.or.jp/thewayweare/>

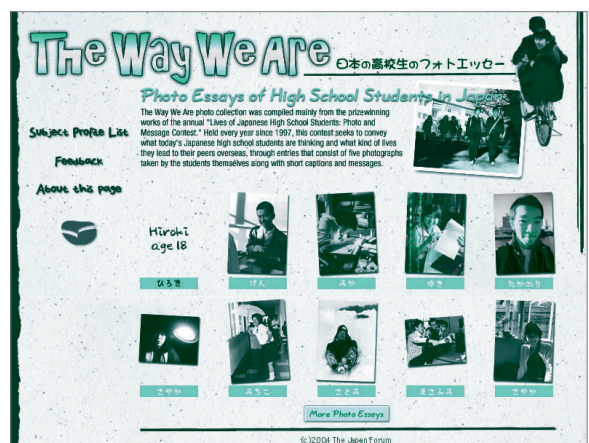
TJFは1997年から、高校生自身が写した5枚の写真とエッセイで、日本の高校生が何を考えどんな生活を送っているのかを同世代の若者に伝えてもらうという趣旨で、「高校生のフォトメッセージコンテスト」を開催してきました。これまで、コンテストの入賞作品を中心にまとめた写真集『The Way We Are 伝えたい私たちの素顔』(日本語版・英訳付)を毎年発行し、海外で日本語教育を行っている高校などに寄贈してきましたが、昨年写真集は主に日本国内向けの媒体とすることにしました。それに伴い、写真集の内容から抜粋した新しい英語版ホームページ「The Way We Are: Photo Essays of High School Students in

Japan」を海外の同世代の若者に向けてオープンしました。

新しい英語版ホームページでは、これまで7回のコンテストに寄せられた2,000近くの作品の中から厳選した写真とエッセイで、個性豊かで多様な日本の高校生の姿を親しみやすく紹介するため、内容を一新しました。英訳には、必要に応じて注をつけ、説明用の写真や解説へリンクもしています。写真には音声をきけるようにしたものもあり、日本語や日本について学んでいる海外の高校生が、楽しみながら日本の高校生の姿や日本語に触れることができるよう工夫してあります。日本語学習者向けには、オリジナルの日本語のメッセージを、やさしく書き直したキャプションやエッセイもあわせて用意しています。サイトには掲載した高校生のリストのページも設け、多くの高校生の中から、それぞれの趣味や住んでいる所や大切にしているものなどを手がかりに、関心のある人を選べるようにしてあります。

TJFの「高校生のフォトメッセージコンテスト」の日本語ホームページ(<http://www.tjf.or.jp/photocon/index.htm>)には、過去7回のコンテストの入賞作品が掲載されており、より多くの高校生の姿を見ることができます。また、TJFフォトデータバンク(<http://databank.tjf.or.jp/intro.html>)には、このコンテストの応募作品のほかに、日本の小中高校生の生活を写した写真を多数掲載しています。カテゴリーにより必要な写真を検索することもできます。あわせてご利用ください。

(辻本京子)



▲ トップページ

## 2004年度第1回通常理事会・評議員会報告

去る5月19日、TJF会議室で理事会・評議員会が開催され、①2003年度事業報告ならびに収支決算承認の件、②評議員

一部交代の件を審議し、いずれも承認されました。

TJFの2003年度の事業については、理事、評議員とも、事業の意義およびその着実な進展を評価する一方、現在TJFが取り組んでいる事業の意義をいかに社会全体に広め、共鳴者を増やしていくかが今後の課題だとの意見が出ました。TJFの事業に関する広報活動をさらに拡大する必要がある、また、日本国内の学校教育における中国語教育、韓国朝鮮語教育についても、その裾野を広げていくためには、教育行政にもっと働きかける時期にきているのではないかと、たとえば正規の科目として採用されなくても、1週間程度の短い授業時間で導入を図

るとような内容を学習指導要領のなかで位置づけてもらうことも必要である、との意見でした。

約10年の歳月を経て、ようやくTJFの日本国内での事業の基盤ができてきたように思います。とりわけ高校の中国語教育と韓国朝鮮語教育で、教師とのネットワークが構築され、教師研修会の開催、教材の開発、授業案の収集、学習奨励等の事業も一定の成果を上げつつあります。しかし、これからはこうした当事者とのつながりを基盤にしつつ、その枠から出て、外に向かって働きかけをしていく必要があると考えています。

(中野佳代子)

### 第1回全中国小学校日本語教師研修会実施概要

TJFは中国遼寧省基礎教育教研培训中心との共催で、中国で初めての小学校日本語教師研修会を開催します。現在中国では、60校余りの小学校において日本語教育が実施されています(教師数は約100名)。TJFは今後二、三年の計画でこれらの日本語教師全員に対し研修会を実施していく予定です。概要は以下の通りです。

- **開催日時**: 2004年7月25日(日)～8月5日(木)(研修12日間中休み1日)
- **開催場所**: 中国遼寧省瀋陽市(遼寧省基礎教育教研培训中心)
- **主催**: 遼寧省基礎教育教研培训中心、財団法人国際文化フォーラム
- **助成**: 独立行政法人国際交流基金、財団法人三菱銀行国際財団
- **後援**: 黒龍江省教育学院、吉林省教育学院、中国教育学会外国語教学專業委員会、中国課程教材研究所、在中国日本国大使館、在瀋陽日本国総領事館、独立行政法人国際協力機構(予定)
- **参加者**: 50名(遼寧省:30名、黒龍江省:15名、吉林省:2名、その他の地域3名)
- **講師**: 山田泉: 主任講師/法政大学キャリアデザイン学部教授、齋藤ひろみ: 副主任講師/東京学芸大学国際教育センター助教授、飯野令子: 講師/元JICA派遣青年海外協力隊シニア隊員、稲田登志子: 講師/国際交流基金派遣青年日本語教師、鳴海佳恵: 講師/国際交流基金派遣青年日本語教師、山田花尾里: 講師/東北師範大学外国語学院講師

### 帝塚山学院大学国際理解研究所主催 第30回国際理解教育賞論文募集

■ **要旨**: 「地球市民」として生きる人間を育成する国際理解の教育をどうすすめるか、またどのように進めてきたかをテーマにした実践・理論の未発表の論文を募集。

■ **応募対象者**: 論文の狙い、内容など概要を2,000字以内にまとめ、2004年9月15日までに同研究所へ提出。

■ **問い合わせ・資料請求先**: 帝塚山学院大学国際理解研究所(担当: 真嶋・宮本)  
〒589-8585大阪府大阪狭山市今熊2丁目1823  
TEL: 072-365-1981 FAX: 072-365-8805  
E-mail: rikai@tezuka-gu.ac.jp  
URL: <http://www.tezuka-gu.ac.jp>

\*TJFは、国際文化フォーラム賞として、入賞2編に対し副賞各10万円を授与しています。

### 事業報告

- \* 「であい」プロジェクト運営(通年)
- \* 『国際文化フォーラム通信』第62号発行(2004年4月)
- \* 『小溪』No.20発行(2004年4月)
- \* 『ひだまり』第19号発行(2004年4月)
- \* 平成16年度日本語教育学会春季大会助成(2004年5月)
- \* 異文化間教育学会第25回大会助成(2004年5月)
- \* 2004年高等学校中国語教育全国大会後援(2004年6月)
- \* REX-NET設立記念国際教育シンポジウム助成(2004年6月)
- \* 小学校生活写真教材セット発行(2004年6月)
- \* The Japan Forum Newsletter No.33発行(2004年6月)
- \* 『The Way We Are 2003 伝えたい私たちの素顔』発行(2004年7月)

## ぜんぜん違う二人だからこそ ずっといい関係でいられる。

宮里三奈(沖縄県立真和志高等学校)

写真を撮りはじめたきっかけは、ピンホールカメラという空き缶に開けた小さな穴をレンズ代わりにするカメラを、学校の授業で使ったことです。その後、インターメディア部で写真に取り組んでいるうちに、現象が楽しくなったり、カメラのシャッターの音が好きになったりして、写真がだんだん面白くなってきました。今回の受賞は、素直にうれしく思っています。もっとうまくなるように努力し、今より少しでもいいものを撮りたいと思うようになりました。

主人公の「ちいーかあー」こと千佳は、双子の姉です。双子というと顔も性格も同じだと思われがちですが、私たちはぜんぜん違います。撮影にかけた時間は1ヵ月くらい。千佳と大喧嘩しましたが、久しぶりにショッピングに行ったり、少し遠出したりして、楽しい時間をたくさん過ごしました。

千佳はかっこよく、私にないものばかり持っています。私は彼女のように素早く行動することができないし、優柔不断です。けれ

ど、千佳は自分の意志をちゃんと持って行動し、家の手伝いや部活の練習をテキパキこなします。一番近くにいる憧れの人です。

今回の撮影で分かったことが二つあります。一つは、ぜんぜん違う二人だからこそ、今までも、そしてこれから、ずっといい関係を続けていけるということです。人は、まるでなにかを補うみたいに、お互い自分がないものに憧れるものなのだと思います。千佳も私の自由奔放さがうらやましいと言っていました。だからたとえケンカしても、次の日にはきれいきつぱり忘れていい関係でいられるのでしょう。

もう一つは、まったく異なる二人にも、自分の夢を叶えるため一生懸命努力しているという共通点があることです。私は芸術家、千佳は警察官。今はまだ「叶えたい夢がある」というだけの二人ですが、将来は「夢を叶えた」という共通点のある、まるで親友みたいな双子の姉妹でいられればいいと思います。 **インタビュー・構成:今井陽一**

TJFが主催する「高校生のフォトメッセージコンテスト」の参加者を取材し、いつの間にか私たちの間に定着してしまった“今どきの高校生”のイメージを変えてくれる、ちょっとイイ話を紹介します。



「私の分身、双子の姉ちいーかあー」より(5枚組作品の一枚)



三奈さん(右)と千佳さん(撮影:北郷仁)

### 宮里三奈(みやざと・みな)さんのプロフィール

沖縄県那覇市に生まれる。趣味は雑誌の切り抜きで、コラージュを作ること。好きな音楽は沖縄民謡。好きなことばは「幸せ」。大切なものは、悩みを真剣に聞いてくれたり、一緒にいて楽しい時間を過ごせる友だち。最近熱中していることは、シルバーリングを作ること。将来は、写真やデザイン関係の仕事について、バリバリ働きたいと思っている。第7回コンテストで、優秀賞を受賞した。

### 編集後記

今号の特集は、TJFの米国駐在代表連絡員として、日米間のTJF事業を支えてきた伊藤幸男による日米の友好校交流の橋渡しを紹介したものである。伊藤は米国側の日本担当として、米国の全米州教育長協議会と日本の都道府県教育長協議会の交流プログラムの橋渡し役を務めている人でもある。長い間スペイン語教師として、あるいは日本語教師として米国の高校で教壇に立ち、また米国の州の教育行政にも関わってきた。TJFのスタッフである伊藤の名を挙げて特集を組んだのは、以上のような理由からである。

伊藤は戦災孤児だったにもかかわらず、持ち前の努力と才能で、当時、少数の有能な青年にしか付与されなかった奨学金を得て渡米し、能力主義の米国社会において、その地位を確立した。米国内の小中高校の日本語教育の黎明期を支え、全米中等教育日本語教師会の設立に尽力した一人でもある。日米を結ぶTJFの事業も、伊藤が長い間追い続けてきた、日米の架け橋になりたいという夢を共有し、その夢の実現のために協力することから始まったとあっていいと思う。

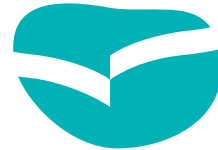
今回紹介した三つの事例については、誌面の制約があり、水面下で多くの仕掛けを試みて実現に漕ぎつける伊藤方式の概略しか紹介することがで

きなかったが、方式を支えているものがかいつかある。一つは、メインストリームにいる人々、協力を得たい周辺の人々に対して絶えず気を配り、献身的な働きかけを行いながら、プログラムに巻き込んでいくこと、二つめは、心底から子どもが好きで、最初から最後まで凛とした教育者であり続けていることである。ホームステイ先の情報を前もって丁寧に子どもに伝え、お土産を用意させる、事前に手紙を書かせる等々、細かい配慮も欠かさない。ネクタイをしないで教室に行ったことがないという教師でもあった。三つめには、特集でも述べているように、本気で交流に関われる仲介者なくしては、交流は継続しないという考えのもとに、後進を育てることに力を注ぎ、惜しみない援助をしていることである。リン・セスラー先生は、伊藤の期待に見事に応えて、今では全米の優秀教師にノミネートされるまでになった。そして、最後に何よりも大事なのは、日米双方の教育事情に通じていることである。

これらの動きを私は傍で見ながら、とても自分にはできないと思いつつ、それでもノウハウを少しでも盗もうとしてきたことも事実である。子どもたちが喜んでくれればそれまでの苦労はみんな報われる、そんな純粋な思いがすべての原点にある。

**中野佳代子**

財団法人 国際文化フォーラム  
THE JAPAN FORUM  
(TJF)



国際文化フォーラム通信63号  
2004年7月発行

発行人・編集人 中野佳代子  
デザイン・DTPオペレーション 飯野典子  
フォーマット設定 鈴木一誌  
出力・印刷・製本 近代美術(株)  
校閲(有)天山舎

財団法人 国際文化フォーラム

〒163-0726 東京都新宿区西新宿2-7-1  
新宿第一生命ビル26階  
TEL 03-5322-5211 FAX 03-5322-5215  
E-mail: forum@tjf.or.jp  
http://www.tjf.or.jp/